



「私が使いたい言葉」

＝第7回日本語大賞・表彰式を開催＝

日本語の美しさや言葉の持つ力を見直すことにつながる優れたエッセーや作文に与えられる「日本語大賞」（日本語検定委員会主催）の第7回表彰式が、2月28日、文部科学大臣賞の受賞者4人らが出席して東京都北区の東京書籍本社ホールで行われました。


第7回のテーマは小学生、中学生、高校生、一般とも共通の「私が使いたい言葉」。メキシコ、米国、英国、台湾、マレーシアなど海外13カ国からの78点を含めて、小学生の部806点、中学生の部323点、高校生の部99点、一般の部317点の計1545点の応募がありました。

第1次、第2次の審査を経て、審査委員10人による最終審査が行われ、小学生の部（文部科学大臣賞1点、優秀賞3点、佳作6点）、中学生の部（文部科学大臣賞1点、優秀賞3点、佳作5点）、高校生の部（文部科学大臣賞1点、優秀賞2点、佳作6点）、一般の部（文部科学大臣賞1点、優秀賞2点、佳作6点）の4部門の各賞が決まりました。



この日の表彰式には▽小学生の部、メキシコ・アグアスカリエンテス日本人学校小学部4年、野崎竜聖さん▽中学生の部、大阪府・大阪教育大学附属池田中学校2年、吉田菜々穂さん▽高校生の部、東京都・和光高等学校2年、多田悠歩さん▽一般の部、岐阜県・伊藤喜治さん一の文部科学大臣賞受賞者4人が全員出席し、それぞれに賞状、楯、副賞が贈られました。

表彰式は、フリーアナウンサーで審査委員の梶原しげるさんの司会で進められました。主催者を代表してあいさつに立った梶田叡一理事長（奈良学園大学学長、聖ウルスラ学院理事長）は「4人の作品は着眼点、構成、表現の仕方が素晴らしい。言葉は伝達、思考、認識、判断の道具。みんなで上手に育てていかないと薄っぺらになってしまう」と言葉の大切さを強調しました。審査委員を代表して東京都立田柄高等学校長の大池公紀さんが、文部科学大臣賞受賞作品について講評。「皆さんの思いがしっかり書き込まれている。人の温かさ、日本語の持っている温かさを実感できた」と述べ、いずれの作品も光景や心情をうまく言葉で表し、日本語の魅力を生かしていることをたたえました。

次ページへ続く 

このあと、来賓の文部科学省民間教育事業振興室の助川隆室長から表彰状を受け取った受賞者がそれぞれ自分の作品を朗読しました。



▽お父さんが「ただいま」ではなく「おかえり」と言って帰ってくるのは、一番最後に帰宅するため「おかえり」を家族に言えないからだと知って、お父さんの家族への愛情を感じるとともに、毎日遅くまで働いているお父さんに感謝の気持ちを込めて「おかえり」のひと言を伝えたいと素直に表した、野崎さんの『『おかえり』が教えてくれた気持ち』

▽夏休みに妹と2人で泊まった祖父母の家で、祖母の布団に潜り込んで聞いた怪談話で気分が高揚したのは、「よか夜じゃあー」のように祖母が度々つぶやく「よか」という鹿児島弁に人や故郷を大切に思う気持ちが込められているからだろうと、方言の温かさや魅力に気づいた様子を、さりげないやり取りでつづった、吉田さんの「よか言葉」



▽通学路で毎日出会う人々、学校の友達、祖母や母親らと日ごろ何気なく交わす「あいさつ」には、相手の健康を気遣ったり感謝したりする様々な気持ちが込められていることを、散文詩のような構成でリズムカルに描写しながら、違った色（個性）を持つ一人ひとりが相手への思いを言葉で伝える大切さを七色の虹にたとえて平和への思いも込めた、多田さんの「虹色の言葉」

▽子どものころ嫌々手伝っていた農作業は、手抜きをすると作物が立派に育たず田畑の景観も綺麗でなくなってしまう。「田んぼはおしゃれさんやでな」と諭すように手抜きを戒めてくれた母の優しい言葉を改めてかみしめると、日ごろの会話に親子の絆や信頼を強める力が秘められていることや、人と自然が織り成す農業や農村の風景を文化として次世代に継承すべきものだ気付かせてくれる、伊藤さんの「田んぼはおしゃれさん」一の順に朗読。



読み終わると会場から拍手が沸き、梶原さんのインタビューに4人は、言葉少なながら喜びの表情を浮かべていました。

最後に沖田庄二専務理事が閉会の辞を述べ、表彰式は約1時間で終了。ご家族や審査委員らが表彰された4人を囲んで記念撮影も行われました。

(文責：時事通信社 升谷 昇)

